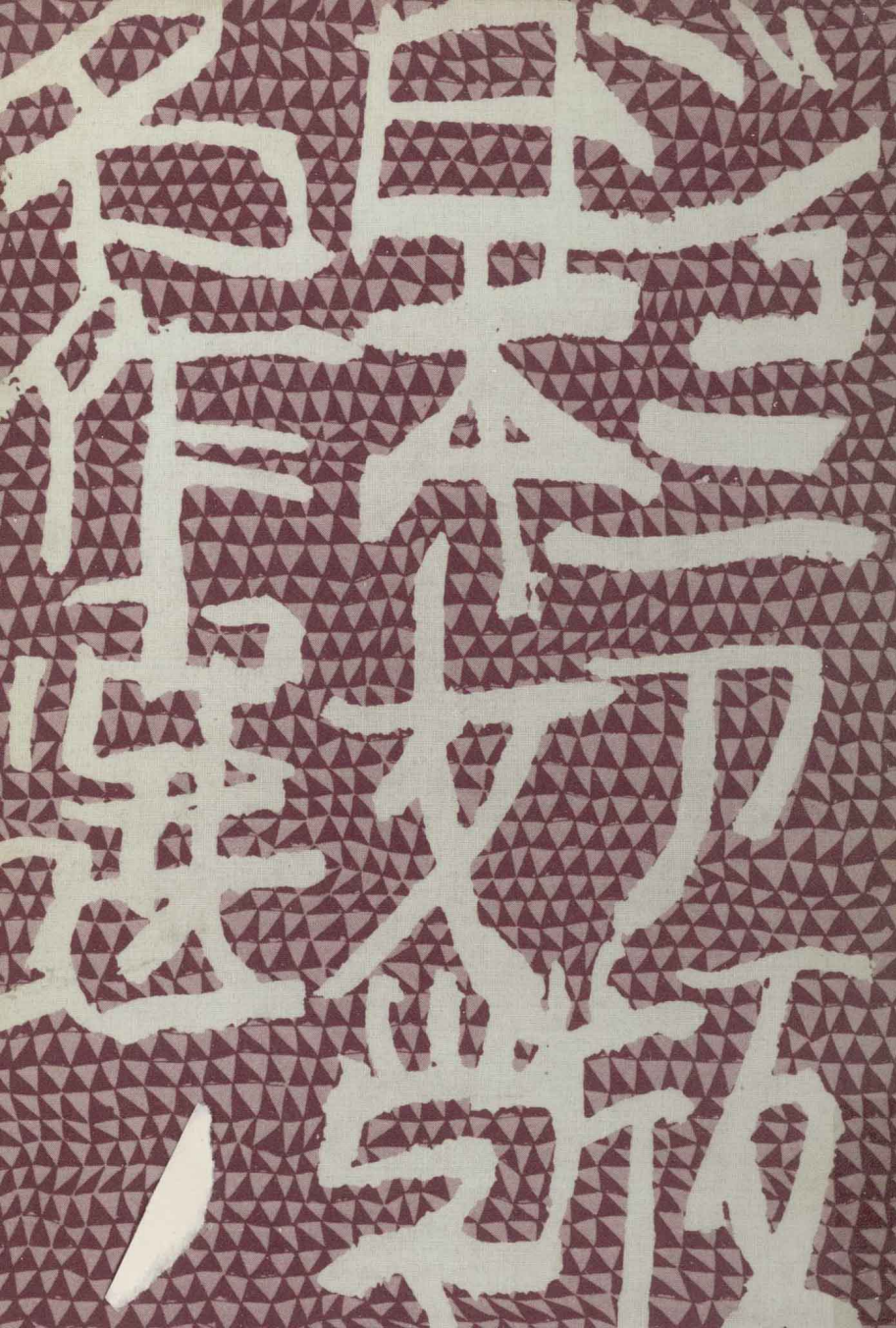


傍の石

●ジュニア版日本文学名作選——〈8〉●山本有三●偕成社

《原作を全文収載》

路傍の石（ジュニア版日本文学名作選8）
昭和四十一年五月十日　発行
定価　二百九十円

著者　山本有三
発行者　今村　広
印刷者　小泉松三郎
印刷所　新陽印刷有限会社
発行所　株式会社　偕成社
東京都新宿区市ガ谷砂土原町二の四
振替　東京一三五二番

●N・D・C　913

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

❄この本について

福田清人

毎年、新聞社などによって、若い人たちの読書調査が行なわれます。日ごろ、小・中学生がどんな本を愛読しているかという調査です。その統計によると、きまってこの山本有三先生の『路傍の石』が、夏目漱石の『坊っちゃん』などとならんで上位をしめています。

このように、この作品は、若い人たちの心をつかみ、必読書のようになっています。それは、この小説の主人公、吾一少年の真剣な生きかたに、読者の心が強くひきつけられるからです。

『路傍の石』は、もともと、おとなの文学として書かれたものなのです。ところが、調査でもわかるように、現在では少年少女にも広く愛読されているのです。フランスのある批評家は、児童たちは自分のためになり、興味をひきずるものなら、たとえおとなの文学でも自分のものにしてしまう、といっています。『宝島』『ガリバー旅行記』などすべてそうです。『路傍の石』も、そのよき一例というべきです。

なお、山本先生は、若い人たちに非常な関心をいだいている作家です。そのため、かつて、「日本少国民文庫」を編集したり、東京都下三鷹にあった自宅を、児童図書館として多くの図書とともに東京都に寄付したりしました。こうしたあたたかい愛情が、また『路傍の石』にも流れていて、若い人たちの心にうったえるのだと思います。

目次

山本有三

●路傍の石

くち絵のかわりに……6
中学志望……14
その夜のことば……26
実学……44
意地……57
赤い糸……79
吾一……100
先祖といえがら……117
うつりかわり……136
前かけ……155
やぶ入り……172
物価とうき……192

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

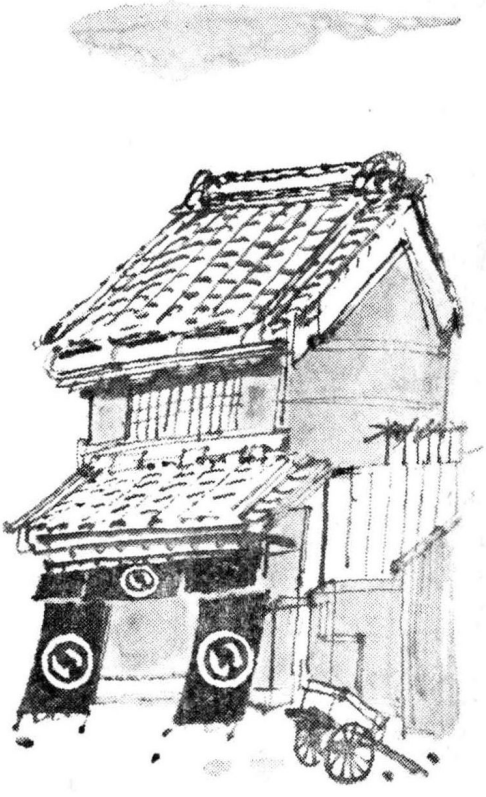
東京……210
ダルマさん、ダルマさん……227
かんなん、なんじを玉にす……244
言いわけでは、ランプはつかない……266
次野の先生……283
●解説……立教大学教授 福田清人……306

装幀―AD 沢田重隆・D 坂野豊

さし絵―須田寿

路傍の石

ジュニア版日本文学名作選——〈8〉山本有三



くち絵のかわりに

そのとき、吾一（ゴイチ）は学校から帰ったばかりだった。はかまをぬいでいるところへ、おとっつぁんが、ひょっこり帰ってきた。おとっつぁんは、彼に銅貨（ドウカ）を一つ渡して、焼きイモを買ってこいといった。よっぽど腹がすいているらしく、いやにせか〳〵していた。

吾一は、いそいで路地（ロジ）を駆（カ）けだして行った。

ちょうど、おやつの時刻だったので、焼きイモ屋の店さきは、ふろしきを持った小僧だの、おかもちをさげた女中が、黒びかりのする、大きなカマの前に、いっぱい立っていた。なかなか順がまわってこないので、吾一はいら〳〵したが、やっと、彼の番になった。

「おつぎは、おいくら。」

イモ屋のおやじは長い竹のハシを動かしながら、いそがしそうにいった。

大きな店の小僧たちが、十銭も二十銭も買って行くなかで、少しばかり買うのは、吾一はなんとなく、きまりがわるかった。彼はちいさな声で、

「一銭。」といった。

「おいきた。」

主人は威勢（イセイ）よく答えて、カマのなかから、なれた手つきで、ひょい〳〵とイモをはさみあげた。

きょうはばかにまけてくれるんだなあ、と吾一は思った。やがて新聞にくるんでくれた焼きイモを受け取って、厚いカマのふちの上に、一銭銅貨をおくと、

「あっ、ちょっと待った！」

と、おやじはとんきょうな声をだして、吾一から急に包みを取りもどした。そして、三つ、六つと勘じょうしながら、包みのなかのものを、カマへ返しはじめた。おやじは一銭を十銭と聞きちがえたものらしい。向こうがまちがえたのではあるけれども、いったん、包んでくれたもののなかから、数をへらされることは、こっちがわるい事でもしているように見えて、ひどくきまりがわるかった。吾一はカマの前に立っていることが苦しくなって、逃げだしたくなった。

そのとき、

「はいよ。」

といって、おやじが、ちいさな袋を渡した。吾一はそれを持つと、どろぼうのように、こそ〳〵と店さきから姿をけした。

うちに帰ると、どうしたのか、おとっつぁんはいなかった。彼は「おとっつぁーん。」と大きな声をだして呼んでみたが、返事がなかった。さっき、いやにせか〳〵していたから、急に用を思いだして、また出かけて行ったのかもしれない。しかし、こんな思いをして買ってきたのにと思うと、彼はくやしかった。

吾一はそとへ遊びに行きたかったが、あいにく、おっかさんもいないので、買ってきたものを、置きっぱなしにして行くわけにはいかなかった。こんなにしていると、焼きイモがつめたくなってしまう。彼はさめないようにと思って、袋のまゝふところに入れて、あっためていた。しかし、おとっつぁんも、おっかさんも、なか〳〵帰ってこなかった。

と、えりとえりの合わせ目から、なんともいえ

ない香ばしいにおいが、ほど合いのあったかさを持って、ぽうっとのぼってくる。吾一は大いに誘惑（ユウワク）を感じたが、思いきって、両方のえりをぴしんとかき合わせて、顔を横のほうに向けていた。それでも、あごの下のほうから、香ばしいにおいがあがってきたが、彼は目をつぶって、がまんをしていた。すると、今度は焼きイモのぬくもりで、おなかがだん〳〵あったかくなってきた。あったかになってくると、腹がとき〴〵ガマのように、ぐうと、うなりだした。

そのころ、吾一はおやつをたべていなかったから、わけても腹がすいていた。お小づかいをもらわないわけではないけれども、小づかいは、毎日、貯金バコにほうりこむことにしていた。買い食いをしないで、小づかいはなるたけ貯金するようにと、学校の先生からいわれて以来、それを実行し

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

ているのである。しかし三時ごろになると、毎日、おなかがすいてたまらなかった。けれども、そこをがまんして、小づかいをつかわないようにしなくてはいけないのだと思って、こらえてきたが、きょうは、ふところのなかにすばらしいものを持っているのである。しかも、これをたべたところが、貯金は少しもへるわけではない。あごの下からは、あい変わらず香ばしいにおいが鼻を突いてきた。焼きイモのにおいというものは、特別、鼻を刺激（シゲキ）する。

「おだちんに、一つぐらいいゝだろう。」

とう〳〵、こらえられなくなって、吾一は袋のなかに手を突っこんだ。

きょうのは丸やきなので、わけてもうまかった。彼は夢中で一つたいらげてしまった。一つたべると、前よりもかえって食欲が増してくる。と、ひとりでに手がふところのなかにはいって、また一つ取りだした。さっきの焼きイモ屋での不愉快（フユカイ）なことなんか、もうすっかり忘れてしまっていた。

そして、一つ、二つとたべているうちに、一銭ぐらいの焼きイモは、いつのまにかなくなって、ふところのなかは、新聞がみの袋だけになってしまった。

ぺしゃんこになっている袋が、指のさきにさわった時、吾一は言いようのない寂（サビ）しさにおそわれた。彼は泣きだしたいような気もちになった。そして、ふところの新聞がみの袋を引っぱりだして、はしのほうを、わけもなく、ちぎっていた。

やがて、おとっつぁんがどこからか、あたふたと帰ってきた。おとっつぁんはあがるが早いか、

焼きイモはどうした、といった。
吾一は答えられないので、下を向いたまゝ、焼きイモの袋を、じいっと見つめていた。
「なんだ。食ってしまったのか。しようのないやつだな。」
おとっつぁんはキセルで、火バチのふちを強くたゝいた。
吾一は思わず、すゝりあげた。
「ばか、泣くやつがあるか。」
おとっつぁんはそういって、しかったが、きっとまた、銅貨を投げるのだろうと思った。そうしたら、さっきのような、いやなことはあったけれど、吾一は喜んで、もう一度、イモ屋に駆けて行くつもりだった。
しかし、おとっつぁんはサイフをださなかった。つかれたような顔をして、たゞキセルをくわえているだけだった。
吾一にはそれがまた、たまらなく悲しかった。
ふいに、おとっつぁんの声がした。
「おい、なんだって、そんなところに焼きイモの袋なんかおいとくんだ。早くかたづけちまえ。」
それから、いくんちもたゝない時のことである。
おやつをたべないものだから、吾一は腹がへってたまらなかった。貯金なんて腹がへってやりきれないから、やめてしまおうかと思ったが、先生にいわれた事が守れないのはくやしいと思った。ところが、ほかの友だちに聞いてみると、友だちもみんなやめてしまったという。「それじゃおれも……」と、ひょいと、よわ気になりかけたが、彼はこういう時、かえって、えこじになる子どもだった。

「よし、それなら、おれがやり通してみせる。」

が、どうがんばってみても、腹のへることは同じだった。あるとき彼はうちの前で、ふと、コマをおとした。取ろうと思って縁の下をのぞくと、サツマイモがワラのなかにころがっている。どうしてこんなところに、おサツをころがしておくんだろうと不思議に思ったが、そんなことよりも何よりも、吾一のあたまにぴんときたことは、「しめた。」という、きらめきだった。

彼はさっそく縁の下にもぐりこんで、そいつを一つ取りあげた。なんだか普通のサツマイモにくらべると、少し皮の色がちがっているような気もしたが、たいして気にもとめなかった。皮には、ほとんどどろはついていなかったけれど、彼はつつっぽのそでのさきで、なんどもこすってから、大きくがくりとやった。

がくりとやってから、彼は急に妙な顔をして、ほきだしてしまった。あまみがなくて、へんに水けがあるくせに、かす〳〵していた。きっと、できそこないのサツマイモだろうと、彼は思った。

吾一はそいつをほうりだして、別のをかじってみた。それもやはりかす〳〵だった。このなかには一つぐらい、うまいのがあるだろうと思って、四つ五つ、食いかいてみたが、どれもうまいのに当たらなかった。

「まあそんなところで何をしているの。」

急におっかさんの声が、上から響（ヒビ）いてきた。

「あら、吾一ちゃん。まあ、ダリヤをみんな台なしにしてしまって……」

ダリヤという声を聞くと、おとっつぁんも縁がわへ飛んできた。

その時分は、ダリヤが非常に珍しいころで、ダリヤという名まえさえ、吾一はまだ知らなかった。その球根は父おやが東京からもらってきたもので、たいへん大事にしていたのである。

おとっつぁんは、はだしで飛びおりて、いきなり吾一をなぐりつけた。

「きさまは、どうして、こう食いしんぼうなんだ。ネズミのように、なんでも、かじってしまやあがる。」

その場は、おっかさんの取りなしで、やっとおさまったが、おとっつぁんは、なおぶり〳〵していた。吾一がこんなことをするのは、つまりは、おやつをたべないからである。おやつをたべないで貯金をするなぞということは、子どもには無理な注文である。そんなことは、やめさせてしまえといった。

しかし、吾一はやはり貯金をやめなかった。食いしんぼうといわれたことが、ひどくこたえたのである。食いしんぼうにはちがいないのだが、そうあからさまにいわれると、「食いしんぼうなもんかい。」と、はね返さずにはいられなかった。それに、彼は学校で級長をしていた。おれは級長なんだから、先生のいったことは、どんなことをしても守らなくっちゃいけないんだという考えも、かなり彼を支配していた。

彼は毎日、歯をくいしばって、おやつの時間を辛抱（シンボウ）した。友だちと夢中になって遊んでいるような時には、忘れてしまうこともあるが、雨がふって、うちにいるようなおりには、かなり、つらかった。そんな場あいには、彼は本を読んだり、体操をしたりしてまぎらした。ある時

なんか、たまらなくなって、貯金バコに手をかけたこともあったが、おっかさんからあけ方をおそわっていないものだから、どうしても、あかなかった。あけられないのは、くやしかったが、あとでは、それをしあわせだと思った。

そのうちに、彼はいなば屋の店さきで本を読むことを覚えた。いなば屋は路地の出ぐちの大きな本やで、吾一のうちのおゝやさんだった。はじめは本をたゞ読みすることは、わるいような気がして、はしのほうで、こっそり立ち読みをしていたが、いなば屋のおじさんは、たいへんいゝおじさんで、「君にはこれがいゝだろう。」とか、「こんど、こういうのがきたよ。」なんていって、「世界おとぎばなし」や「少年世界」[1]なんかを、どん〳〵貸してくれた。

吾一は前から本がすきだったが、こういういゝ図書館（トシ■カン）ができたので、彼はます〳〵本がすきになった。彼はどんな日でも、いなば屋の店さきに姿を見せないことはなかった。ダリヤをかじった少年は、こんどは毎日、本をかじっていた。

それから、いなば屋へ行くと、とき〴〵塩せんべいや、おいしいお菓子をもらった。もちろん、それが目あてではないけれども、吾一にとっては、それも、いなば屋へ行く一つのたのしみだった。

一方、貯金はだん〳〵ふえて行った。一日一銭か二銭の貯金だから、たいした額にはならないが、お正月とか、お祭りの時のお小づかいや、あるいは、人からもらったおひねり[2]なぞを、吾一はみんな貯金バコに入れてしまったから、思いのほかのものになった。貯金バコがいっぱいになると、おっかさんはそれを郵便貯金にかけてくれた。吾一

はもう三円になったとか、五円になったとかいって喜んでいたが、この貯金が十円ほどになった時に、父おやはそれを引きだして、自分の訴訟事件（ソシ■ウジケン）のほうにつぎこんでしまった。子どもなんか貯金をしなくてもいゝといっていた父おやだが、事件が切迫（セッパク）してくると、うちにある金は、だれのものでも見さかいなく、持ちだしてしまった。が、吾一は貯金帳がからになっていることは、夢にも知らなかった。

中　学　志　望

「おっかさん、行ってまいります。」

自分のいきがまっ白く、かたまって流れた。吾一はおもわず肩をすぼめた。

でも、松を抜いたあとにさしこんである、かど松のしんが目にはいると、やっぱり、春らしい気がしないでもなかった。が、その青いものも、あたまをちょこめて、さむそうに土のなかにかゞんでいた。

吾一はかど口で二、三べん、両手をこすり合わせると、いそいでいなば屋の路地を駆けだした。カバンのあいだにはさんであるソロバンが、腰のところで、かちゃ〳〵鳴っていた。吾一はカバンをおさえた。でも、ソロバンの玉はおどるのをやめなかった。

「まっすぐ行っちまおうか。」

駆けながら彼は考えた。「京ちゃんとこへ寄ると、おくれるかもしれない。」

おくれては、たいへんである。それが気になってたまらなかったが、しかし、彼はいつものように、やっぱり、京ちゃんのところへ寄ることにし

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.